名所物見の旅　其の六拾八　初秋の大杉谷を歩く

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

日本三大峡谷と謳われる黒部峡谷（富山県）と清津峡（新潟県）は何度かこのシリーズで紹介してきたが、今回は残る大杉谷（三重県）について登山報告したい。

大杉谷概略

紀伊半島の奈良・三重の県境沿いに30㎞に及ぶ台高山脈。その南の一角、大台ケ原に源をもつ大杉谷は、千古斧の入らぬ鬱蒼とした原生林の中を、大岩壁をえぐって流れる峻険な峡谷として、古来より“魔の大杉谷”と恐れられてきた。

明治25年、古川嵩が90日かけて大台ケ原から大杉谷へ下ったのが開山とされ、明治45年には日本山岳会の大北聡彦と伊勢神宮司庁の大西源一が大杉谷を探求踏査して、その遡行記録が発表されたのを機会に登山家たちの注目を浴びるようになった。その後この山域の素晴らしさを紹介した岸田日出男らの働きかけにより、昭和11年に吉野熊野国立公園の指定を見た。昭和15年には近鉄の前身、関西急行鉄道による皇紀2,600年記念事業として大杉谷核心部に探勝路が開かれ、翌年山小屋（桃ノ木山の家）が開設されて現在に至っている。

日本有数の多雨地帯・大杉谷の現況

大台ケ原をはじめとするこの山域は平均年間降雨量4,800㍉という多雨地帯として知られ、登山の際は必ず雨に降られると覚悟しておく必要があるという。驚くべきことに大台ケ原では一日の降雨量が1,000㍉を超えたり（大正12年9月14日）、年間降雨量8,214.3㍉（大正9年）を記録したこともある。

2004年（平成16年）には台風による大水害によって大杉谷の登山道は壊滅し、まったく入山できない状態となってしまった。大杉谷を復活させるべく県による復旧工事が進められ、二年前の2010年10月に三重県側登山口の宮川第三発電所から徒歩片道3時間30分のシシ淵（猪ヶ淵）まで通行できるようになった。そして今年になって平等グラの吊り橋が完成して、ようやく名瀑・七ツ釜滝（徒歩約5時間30分）まで行けるようになったのである。長らく休業していた桃ノ木山の家も7年ぶりに営業が再開され、宿泊施設の拠点ができたことで、大杉谷探勝の態勢は整いつつある。七ツ釜滝から上流の谷沿いの登山道はまだ通行できないが、大台ケ原からも林道の迂回路を経由すれば大杉谷へ下降することが可能であるというので、さっそく出かけてみた。

大台ケ原より大杉谷へ

大台ケ原は大きな駐車場とビジターセンターや宿泊施設があり、周辺の周遊や主峰・日出ヶ岳への登山基地となっている。大台ケ原山麓に点在する温泉には何度か訪れたことがあるが、大台ケ原まで来るのは今回が初めてであった。ビジターセンターの案内員によれば久しぶりだという快晴の中、大台ケ原から日出ヶ岳に登る。山頂からは周囲360度の素晴らしい展望に恵まれ、深い谷を隔てて西に大峰山脈、東には熊野灘が遠望できる。山頂にはカラフルなファッションの山ガールや家族連れも大勢いたが、山頂から大杉谷方面に入るとまったく登山者を見なくなった。

石楠花坂と呼ばれる急な登山道を下る。登山道の両側には石楠花の木が密生していて、開花シーズンならば、きっと素晴らしい景観を見せてくれるに違いない。

山頂から二時間で堂倉避難小屋に到着。小屋はしっかりした造りで、悪天候に見舞われたときには大いに助かるだろう。しかし雨が多いせいか内部は湿気てかび臭く、緊急時以外は泊まる気になりそうもない。小屋から林道に出て少し行くと、大杉谷への下降点に出た。本来の道はここから堂倉滝へと下って大杉谷本流沿いに行くが、いまだ堂倉滝の先は七ツ釜滝まで通行不能である。迂回路として林道を延々と7キロ歩いてから、桃ノ木山の家まで登山道を急降下しなければならないので、先は長い。

林道歩きは単調でただでさえ疲れるところに天気が急変して土砂降りとなり、夕闇迫る頃やっとのことで桃ノ木山の家に到着した。夜半に横浜の自宅を出発して、寝不足のまま朝から歩き詰めたことに加え、林道から小屋までの標高差580メートルの急下降では、雨によって滑りやすくなった登山道に神経を使い果たし、極度の疲労困憊状態であった。

桃ノ木山の家での孤独な一夜

宿泊の受付を済ませ、すぐ風呂に入れてもらってびしょぬれの身体を温めると、やっと人心地ついた。しかしそのあとの夕食は、あまりの疲労のせいかまったく食欲がなくなり、一口二口しか箸を付けられない。部屋に戻ると、今度は震えが止まらなくなった。今夜の泊り客は他におらず、だだっ広い大部屋を一人で占領状態だったので、そのまま頭から蒲団をかぶって7時過ぎには寝てしまった。

岩壁が連なる大杉谷核心部の登山道を進むと、吊り橋の向こうに昭和16年に建設された桃ノ木山の家（当初は青年寮と命名された）が忽然と現れる。この小屋は大杉谷探勝に訪れる登山者たちの重要な基地となっている。

赤道直下の安宿の暑苦しい部屋の中で、一人もがき苦しんでいるような夢を見て目が覚めると、汗をびっしょりかいていた。時計を見るとまだ10時前だ。すでに発電機は止まっていて、小屋の廊下は真っ暗闇。フラッシュライトをつけて洗面所に行き、空になった水筒へ水を補給しトイレを済ませる。小屋は増築を何度も重ねた造りで、曲がりくねった長い廊下とたくさんの部屋があり、小屋番がどこにいるのかもよく分からない。なんだか大きな屋敷にひとり取り残されたような気分になる。窓から外を見ると月が出ていて、周辺の岩峰までよく見えている。窓を開けるとひんやりとした外の空気が入ってきた。汗をかいたおかげか気分もよくなり、そのあとは朝までぐっすりと寝ることができた。

日本の滝百選に選出されている七ツ釜滝。この七ツ釜滝を見るにはよほどの健脚でない限り山中に一泊は必要で、この滝まで来れば遥々と大杉谷核心部に到達できたという感慨がある。

大杉谷核心部の探勝

薄明るくなってきて目を覚ますと、筋肉痛は残るがすっかり元気は回復していた。“年齢の割には回復が早いな”などとひとりで自画自賛し、今日一日はじっくり周辺の大杉谷核心部を探索に出かけることにする。まずは上流の七ツ釜滝へ行く。道は岩壁を穿った岨道が続くが、頑丈な鎖が固定されているので何の不安もない。30分ほどで目の前に七ツ釜滝が現れた。三段に落ちる優美な滝で、「日本の滝百選」に選ばれている名瀑である。しかしなにぶん水量が少ない。これは秋の渇水期のせいなのか、それとも上流の発電用取水の影響なのか。高校生の頃読んだ「日本の渓谷」（昭和45年刊）に、“昭和四十年代初頭に大杉谷の上流部に林道が延びて、堂倉滝の下流に発電用取水口が作られたおかげで水量が減り、せっかくの見所であった光滝や七ツ釜滝は昔日の面影を失った”と書かれていたのを思い出した。現在も当時と状況が変わっていないのか皆目分からないが、同じようなことは黒部峡谷でも聞いたことがある。黒部川“中ノ廊下”下部の中洲に黒四ダムが完成して水が堰き止められて以来、“下ノ廊下”の白眉であった「白竜峡」の、竜が暴れまわるような迫力ある峡谷美はまったく失われてしまった、ということを。いまでは取水されていない支流にこそ、本来の姿が残っているのだという。

七ツ釜滝をあとにして、今度は下流に向かうために再び桃ノ木山の家に戻り、吊り橋を渡る。対岸から小屋のほうを振り返えると、昨夕到着した時は土砂降りでよくわからなかったが、小屋の周囲は裏手に聳える高い峯々とあいまって、なにやら仙境の雰囲気が漂っている。

さっそく写真に収めて、そこから沢沿いに下って行くと、目の前にまるで山水画を見るような岩峰が迫ってきた。平等グラの大岩壁である。岩壁を左岸に見てなおも行くと、完成したばかりの平等グラ吊り橋に出た。長い吊り橋は岩壁が間近に迫って高度感もあるが、新設されたばかりの頑丈な吊り橋なので渡るのにも安心感がある。渓谷の流れを右下に見ながら山道をさらに行くと、ニコニコ滝が対岸に現れた。支流から落ちるこの滝は、さすが水量豊な迫力ある姿を見せている。滝の真正面に休憩所を兼ねた東屋が造られており、ニコニコ滝をじっくり鑑賞できるようになっている。そこから岩で埋め尽くされた河原に下ってシシ淵に降り立つと、神秘的な深い淵の向こうにニコニコ滝が眺められ、幽玄なる峡谷美ここに極まれり、といった趣がある。ここでゆっくりと大杉谷の景観を堪能しながら、お湯を沸かして昼食にする。

シシ淵（猪ヶ淵）からニコニコ滝を望む。秘境大杉谷のなかでもこの周辺は特に深山幽谷の雰囲気が漂っている。支流から流れ込むニコニコ滝は水量が豊富で迫力があった。

昼を済ませて時計を見ると、まだ午後1時を廻ったばかりで時間がある。そこで河原から平等グラ吊り橋を撮影しようと吊り橋手前まで戻って谷に降りるが、途中で巨岩に阻まれてどうにも先へ進めない。あれこれ探るうち、巨岩のひとつに工事用ロープが架かっているところがあった。これ幸いとロープを伝って巨岩に登ると、そこからは難なく吊り橋の下まで行くことができた。河原で撮影していると、宮川ダム方面から登ってきた登山者たちが、何人も吊り橋を通過していく。今夜の桃ノ木山の家は賑やかになるに違いない。

歓迎されざる山からの贈り物

午後4時半、小屋に帰り着く。今日は撮影がメインだったのでゆっくり歩いたつもりだったが、カメラや三脚一式を背負っての一日はかなりの疲労感がある。小屋の玄関で登山靴を脱ぐと、左足の靴下が真っ赤に血で染まっている。知らないうちに怪我をしたと思い、急いで靴下を脱ぐとポロッと黒い物体が落ちてきた。

うわ～！ヒルだ。わたしの血をたっぷり吸って、ヒルは丸まる太りかえっている。憎たらしいのでライターの火を近づけると、クネクネと気味悪くのた打ち回った。そして右足の靴下も同じように真っ赤である。両足にヒルが入り込み、しかもまったく気が付かなかった。痛くも痒くもなかったのである。小屋番が急いでヒルを新聞紙に包んで、焼却炉に持っていった。下流から登山者が持ち込んだヒルを、なるべく繁殖させない為にすぐに処理してしまうのだという。足を見ると、両足6~7箇所血を吸われていて、すでに血が固まっている傷口とまだ血が流れているところがある。この騒ぎに小屋の泊り客全員が集まってきて、思わぬ“時の人”になってしまった。「風呂に入るとまた血が出てくるかもしれないけど」と言いながら、親切な小屋番は何箇所にもバンドエイドを貼ってくれた。ヒルに喰われた所はなかなか血が止まらないといわれるが、小屋番によると傷口の上にタバコの葉をつけてバンドエイドを張ると血が止まりやすくなるのだそうだ。しかし居合わせた泊り客と小屋番を含めた14名のうち、誰ひとりとして愛煙家がいなかったのが、わたしにとっては残念なことであった。

一日も早い完全復旧を願う

今回訪れた大杉谷は黒部峡谷“下ノ廊下”と比べれば全体的にスケールダウンするものの、数多く懸かる滝の景観は黒部よりも優れている。黒部の滝は登山道よりかなり離れていたり、あるいは剱大滝のように熟練クライマー以外はまったくその姿を見ることができなかったりするが、大杉谷は次々と連続する瀑布を惜しげもなく登山者に見せてくれる。願わくば一日も早く、七ツ釜滝から堂倉滝までの登山道が復旧して、以前のように大杉谷の全貌を探勝できる日が来て欲しいものである。

長い工事の末、今年（2012）やっと完成した平等グラの吊り橋。この吊り橋の復旧によって、桃ノ木山の家や七ツ釜滝まで行けるようになった。